

bang dream!～花咲グラ
フィティ～

TAICHI121

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

香澄の幼なじみで香澄のやることに巻き込まれがちな山中 拓真（やまなか たくま）や、有咲の幼なじみで有咲がひそかに信頼をおく金子 健次（かねこ けんじ）に幼なじみのりみのあがり症を気にかける村瀬 一成（むらせ いっせい）
たえのバイト仲間で無口の奇才の中臣 博臣（なかとみ ひろおみ）と紗綾のドラマー仲間でチャラ男の川を被った優男の桜井 誠二（さくらい せいじ）
彼らはどんな鼓動を感じるのだろうか・・・

目次

s t a r y	c h e r y
n i g h t	b l o s s o m
6	1

cherry blossom

春一番の朝のこと

フアーア「つてもうこんな時間！香澄の奴と一緒に学校行こうって言ってるし、今日から高校だから早く行かねーと！」

黒髪の少年 山中^{やまなか} 拓真^{たくま}はベッドからガバアと飛び起きた

「行つてきまーす！」

朝食を済ませた拓真は一目散に家を飛び出すと・・・

「待つてたよ！タク！」暗めの茶髪に猫耳のような髪型、さらに星形のヘアピンを付けた

少女 戸山^{とやま} 香澄^{かすみ}が待っていた（ちなみにタクとは香澄がつけたあだ名）

「さ、早く学校に行こう！」香澄は笑顔でそう言った

「やっとなつた」

校門の看板には 花咲川学園 とあった

校門を前に香澄は大きな声で

「今日からよろしくお願いします！」と言った

(おいおい香澄、はしやぎ過ぎじゃないか?)と拓真は思うが「まっ、香澄らしいかな?」とフツと小さく笑い、入って行った

二人はクラス分けの貼り紙を見ようと向かったが、そこには例えるなら満員のライブ会場の如く人だかりが出来ていた

拓真は背伸びをしてなんとか自分のの名前を見つけると、香澄の名前があることにも気付く

「どうだった?」香澄の質問に

「俺と香澄は同じクラスで一組」

「タクと同じクラスだ!」と香澄が喜んでいると

「ん?お熱いねー」横からポニテの少女と

「おお熱い熱い」と明るめの髪を左右に分けた髪形の少年が声をかけてきた

—————

花咲川学園は数年前から共学になった私立高校だと説明をしてから「で、香澄はなんでこの学校を選んだの?」ポニテの少女、もとい山吹やまぶき紗綾さあやが香澄に聞いてきた、「それは、妹が中等部に通ってていいなあーって思ったから!」

「ふーん、ところで拓真だっけか?なんでこの学校を?」明るめの髪の色の子

桜井 誠二さくらい せいじが今度は拓真に聞いてきた

「親の勧めとか、あと香澄に誘われて」

「はーん、拓真、お前いかにも巻き込まれそうな感じな顔つきしてるからなあ」誠二がおちよくと

「そんな事無いって」と卓弥は切り返した

式中に新入生代表が現れなかったというアクセシデントはあったが無事入学式とホームルームは終了し、香澄たちはというと・・・

「まだまだ!」

「ゼエゼエ少し休んだ方がいいって香澄!」

部活の見学と体験をしまくっていた!

「せっかくだしタクも!」と香澄に言われた拓真は香澄についていたが、まさかこんなにきついいとは思っていなかったし、何より香澄が元気すぎて振り回されていたので

「今日はここまで!」

「やっと帰れる」拓真はタジタジになりながらも帰路についた・・・

その夜、自宅の布団の中にいる拓真の頭のなかを今朝、行きの路面電車の中で聞いた

香澄の

『私ね、昔“星の鼓動”を聞いたことがあるの。』

『それは、ものすごくキラキラしてて、ドキドキしてた!』

『だからね、高校でもキラキラドキドキできるものを探してるんだ!』

そんな台詞が駆け回っていた

「キラキラドキドキか・・・」

「明日、学校にギター持っててみるか」

次の日、学校に着いた香澄は拓真が背負っているギターケースを見て、

「タク、それは何?」と聞いてきた

「ギターだよ」

「今ここで鳴らせる?」目を輝かせながら香澄が聞いてきた

「無理、ここで弾いたら変な目でみられる」

「えー」香澄はとてつもなくがっかりしていた

「でも、いつかは弾いてあげるから心配するな」

「やったー!!!ありがとうタク!」ギユッ

香澄はさっきのがっかりした態度が嘘のようにすごく嬉しそうに拓真に抱きついた

!

「香澄！いきなり抱きつくな！」

周りの目は暖かく見守っている人もいれば、爆発しろと睨む人も、中にはいいぞもつとやれと煽る人と、色々だった。

続く

s t a r y n i g h t

この日も部活の見学や体験で、案の定ヘトヘトの拓真とまだまだ元気が残っている香澄は帰路に着いていたが、

「あれ？何だろうこれ？」と道路のガードレールの裏に金色に輝く星のシールが貼つてあることに気が付いた。

「ん？これ同じのか？」今度は拓真がそのシールが貼つてあった所からちよつとだけ離れた所に同じようなシールがあることに気付く、さらに香澄が「これ、まるで繋がつてみたい！」星のシールが続くように貼つてあることに気付くとそれを追い始めた！
「待ちなよ香澄！」疲れつつも香澄を追いかけた

そして二人が向かった先に・・・

「質屋 流星堂」と看板がある、香澄は気づいてないようだが拓真は「ん？」と気づいていた

しかも香澄はその敷地に入つていつてしまった！拓真は入る前に気づき立ち止まっていた、

そんな中、眼鏡を掛けていて若干長身でちよつと長い髪を後ろで束ねている少年が

「そんなところに突っ立って何してんだ？」

「なるほどな、つまりお前の幼なじみが勝手にここに入って来たのを止めようとしたけど他人の敷地だったからうかつに入れなかった訳だな？ 拓真？」 眼鏡を掛けて髪を束ねている少年、金子 健次が拓真の事情を聞き確認をした

「ああ、今話した通り」 拓真は頷きながら答えた

「それなら今蔵の中で蔵の主から説教中だぜ、俺が有咲に事情を話すから解放してもらおう」

「おい！ 健次！ 何でお前も人連れてきてんだよ！」 随分と男勝りな口調で蔵の主の金髪いのツインテ少女こと市ヶ谷 有咲（拓真は健次からその名前を聞いたので知っている）が怒る

「ごめん、彼がその女の子を迎えに来たらしいから、彼女を放してやって」 健次の説明に有咲は

「まあ、こいつの迎えならいいか、んで名は？」

「山中 拓真です」

「拓真か・・・おい、香澄！ 迎えが来たぞ！」

しかし香澄はそれを無視し、

「ねえ、これは？」と星のステッカーが貼られた横長のケースを見ていた

「知らねえ、多分質流れのモンだろ」有咲は冷たく返すが

「これギターだ・・・」と拓真が

「しかもESPってよ、なかなかの高級品じゃん・・・」健次が続く

「ねえねえ、有咲！さわってみていい？」

「いや、ダメだ！」香澄の問いに対して断固反対の態度をとる有咲に対して

「有咲おねがーい！」と香澄も諦めずに有咲の服の裾を引っ張る

「あー服が伸びちまう!!」

「まあまあ市ヶ谷さん、俺も高級品のギターが気になるし、中身を見たい」拓真が援護するように言った

「俺も拓真に賛成」健次も香澄に味方した

「って健次お前もか!・・・わかったから!」3対1の押しに負けた有咲は

「でも触ったら帰れよ」と条件付きでケースの中身を見せることにした

「ありがとう!有咲!」香澄はワクワクしながらケースを開け、それを男子二人も固唾を飲んで見ていた

そこには赤色のボディに星のマークがあしらわれ、まるで星のような形の変形ギター

だった!

「すげえ……」

「まじかよ……」

「ねえねえ有咲! 弾いてみていい?」ギターに付いていたストラップでギターを持った香澄が目を輝かせ続け言った

「ダメだ! つーかそんなにギター弾きたいならライブハウスにでも行けば?」

「オイオイそこはスタジオリじゃないか?」

「シーツツツコむのは止めよう」

男子二人が小声で話してたのを尻目に有咲は

「健次、お前ならここの近くのライブハウスの場所知ってるだろ?」

「え? ああ、それなら良いところを知ってるぜ有咲」

「案内しろ」

「オーケー」

—————

健次曰くここからそのライブハウスまでは歩いて行けるので徒歩で行こうということになり、皆で向かっていった「香澄、さすがにその格好で歩いたら皆から変な奴に」何故かギターを構えたままの香澄に拓真は言いかけたが、香澄は聞く耳を持たないし、有

咲が「つーかこれ店の物だぞ、このドロボー」とかでかき消されたので途中で止めた。そうこうしている内に

「着いたぜ」

目的地のライブハウスに来ていた

看板には

『SPACE』とあつて

中に入ると受付のカウンターに、けっこう年をとっているようでどう考えても気難しそうな様子の女性が座っていて、拓真達は

「この店長さんか・・・」とか

「怒らせたらダメな人だ」とか

と考えていたが怖いもの知らずの香澄は

「ギター弾かせてください！」と堂々とやってきたが、オーナーの女性は

「ここはスタジオじゃないんだよ、ここはオーディションに受かったバンドだけが立てるステージなのさ」とあっさり断った

拓真と健次と有咲は「ほら言われた」と同時に思った

そしてオーナーの女性は

「でもせっかくだ、見ていかないかい？」と香澄にだけ聞いてきたと思いきや

「そのアンタ達も」と拓真達の方を見て言った

「え？いいんですか？」拓真が返すと

「ああ、でもモツシユとダイブは一切禁止、それにアンタ達は」

「皆高校生です！」香澄が割って入るように言った

「じゃあ600円」

「？」

「チケツト代だよ香澄」

「あー持つてる！」

と皆は600円づつ払うと

「香澄、先に行つてていい」

「俺らは先にドリンクを貰いに行つてくる」

男子二人はドリンクカウンターに向かった

「コーラを」

「コーラ一つ」

「どうぞ」と校則でもギリギリだとおもわれるような黒髪に右半分金髪のメツシユを入れてる男子と

「コーラです。どうぞ、」と腰の辺りまである黒髪がきれいな女子からコーラを受けとり

客席に戻ると

「うお」

「パンパンじゃん」

とさつきより客が明らかに増えていた。

そのなかには小柄のショートヘアの女子とか少し背の高い片目だけ隠れるような前髪をしている男子とかもいて

そして歓声のなかステージに上がってきたのは

「ここではかなりの人気の学生バンド”Glitter green”だった

『みなさん！遊ぶ準備は出来てますかー！』

とギターボーカル、もとい牛込うしごめゆりゆりがオーデイエンスを煽り

その日は楽しい夜になった

—————

あの二人と別れ、ギターも返し、帰路に付いてから

「楽しかった！」香澄は満身の笑みを浮かべながら言ったそして、

「あのね、タク、」

「何だ？香澄？」

「絶対SPACEでライブしたい！」

続く